HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東京大学総合研究博物館公開講座を受講して
Author(s)	市川, 秀雄
Description	研修参加レポート
Citation	北海道大学農学部技術部研究・技術報告, 7, 19-21
Issue Date	2000-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35392
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_p19-21.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜研修参加レポート＞

東京大学総合研究博物館公開講座を受講して

博物館　市川秀雄
（環境・飼育系　植物管理班）

はじめに

博物館は資料の収集、整理、展示を含め一般社会に広く公開する教育的役割の機関と定められている。また資料に関する調査も専門的分野の研究者が調査し、多くの情報を提供する場でもある。この専門的分野の研究者が〝学芸員〟で、この資格を取得するにあたり博物館学を学ばなければならない。その中で実務的な業務を行う博物館実習の依頼が昨今当博物館にも多くなり、その技術的指導も向上しなければならない。

今回、平成10年度の東京大学総合研究博物館の公開講座を受講する機会を得た。期間は平成11年2月15日から2月18日迄の4日間で、参加者は全国から30名弱が集まったが、東京大学総合研究博物館のボランティアの方の参加が多かった。ここにその報告をする。

研修内容

ここでは、「博物標本の作成：その理論と実際」と題し、自然史系分野の様々な標本作成の理論をもとに、実例を示しながらの講義であった。

1日目は「剥製」林　良博　東京大学総合研究博物館館長、「木材」鈴木　三男　東北大学理学部附属植物園園長、「魚類」坂本　一男　おさかな普及センター資料館館長の講義があった。

林　館長の講義の前半は、主催者側の挨拶とし、東京大学総合研究博物館設立の経緯、概要の説明、国立大学博物館の理想と実際などの話があった。そのなかでオランダのライデン博物館を引き合いに、街全体が博物館であり100年先の標本を収蔵できるスペースを確保してあると言う興味ある話をされ、日本の特に大学博物館ではスペース、予算面で資料の分散も一つの方法と考え、資料管理を電脳（デジタル）化することでその役割は果たせるのではないかとの考えを示された。

後半は本題に入ったが、一次資料化が完了した学術標本を今後どのように活用していくかが問題で、資料の情報公開を望んでいた。個人的には標本の作成を期待し

ていたが、それがなかったのが残念だった。「木材」の講義では、植物学研究の資料として古い標本の価値観が問われていることを指摘した。十分理解して活用することが重要なことだろう。「魚類」は、17 世紀中頃から液浸保存においてエチルアルコールが使用されるようになってから、技術的には当時とほとんど変わっていない。褪色しやすい色彩の記録については撮影技術の進歩に伴い後世に残すことができるので活用することを進めた。また、難しいライティングの実演があり、興味深く見入った。

2日目「骨格・化石標本」諏訪　元　東京大学総合研究博物館助教授、「動物化石・軟体動物」棚部　一成　東京大学大学院理学系研究科教授、「植物標本」大場秀章　東京大学総合研究博物館教授の講義があった。「骨格・化石標本」・「動物化石・軟体動物」では、いずれもシリコン・石膏を使ったレプリカ作製が中心であった。凝縮された化石から科学的データーを引き出す前にレプリカを作ることによって、教育、展示標本として活用できる点を上げていた。「植物標本」ではイギリス・キュー植物園の The Herbarium Handbook.とカナダ農業省の Collection and Care of Botanical Specimens.を紹介し、それにもとずいての標本作製法の講義であった。ヒマラヤ調査時の簡易的乾燥のし方の紹介もあったが、新しい研究に利用できるように常に作り方の改良が図られていること、ラベルの作成上の注意点など参考になった。

3日目「植物化石」西田　治文　中央大学理工学部助教授、「岩石・鉱物」田賀井　篤平　東京大学総合研究博物館教授、「動物標本」高槻　成紀　東京大学総合研究博物館助教授の講義があった。「植物化石」・「岩石・鉱物」ではピール法（peel=はがす）の紹介があった。いずれも閉じこめられた過去の情報を探るうえで開発された方法で、実際にピールを作り、実体顕微鏡で観察を行った。「動物標本」ではシカの頭骨標本の作製で、剥皮した頭骨を煮沸・除肉し、そこから得られる情報を解析した。なかなか得られない実際が体験できた。

4日目「海藻」吉崎　誠　東方大学理学部教授、「微小化石・微小動物」塚越　哲東京大学総合研究博物館助手の講義があった。「海藻」では二講の時間が使われ、午前中はその理論についての講義があった。乾燥させた標本は 200 年以上経っても、水を加えると形態分類学、また近年盛んに行われている遺伝子研究にも耐えうるほどに組織が復活することに驚きを感じた。「微小化石・微小動物」では、体節からわかる貝形虫類の体制の進化について、走査型電子顕微鏡を駆使し、立体的に見ることにより、他の甲殻類と同等の体制評価が可能になったことを上げていた。顕微

鏡の操作テクニックに感心した。

おわりに

自然史系の研究では、できるだけ多くの事例や標本を必要とする。自然を構成するすべてのものは実に多様で、その多様性の解明は博物館の使命でもある。こうした自然史系の標本の収集と保全に努め、後世に残し、さらなる研究に活用されるよう維持、管理するのも博物館の仕事である。

この公開講座に参加して、多様性解明のための研究手法の進歩に感銘を受け、その重要性を新たに認識した。今後の博物館活動におおいに生かしていこうと思った。

最後にこの講座を受講するにあたり、技術部長を始め、多くの方々の御理解のもと参加することができ深く感謝する次第である。